第20回学術大会 関連演題

「虐待体験を考える患者の対人信頼感と愛着のタイプについて」

大野 京介 (大野クリニック 院長)

抄 録

精神科外来において、幼、小児期の虐待体験を訴える患者に遭遇することは少なくはない。この体験は、成人してからも対人関係のあり方に大きな影響を及ぼしている。今回、この患者群に対し対人信頼感尺度とアダルト・アタッチメント尺度を用い、対人信頼感と愛着のタイプについて検討したので報告する。

虐待体験を訴える患者の 対人信頼感と愛着のタイプについて

第20回日本外来臨床精神医学会 令和2年2月16日 大野クリニック 大野 京介



全国210カ所の児相に寄せられた通報や相談、警察からの通告のうち、児相が虐待の疑い が強いと判断し、親への指導や施設入所などの対応を取ったケースを集計した。

内容別では「面前DV」や他のきょうだいと差別的扱いをするなど心理的虐待が8万838 9件(前年度比1万6192件増)と最多で、全体の55%を占めた。次いで身体的虐待が4万256件(同7033件増)、ネグレクト(育児放棄)が2万9474件(同2653件増)。性的虐待も1731件(同194件増)あった。

都道府県別では大阪が2万694件(同2282件増)で最多。神奈川1万7272件(同3344件増)、東京1万6967件(同3260件増)と続き、最少は鳥取の80件(同4件増)。児相に寄せられる情報は警察からの通告が7万9150件で最も多く、全体の50%を占めた。虐待児童本人からは1414件で全体の1%だった。

はじめに

幼小児期の虐待体験を有する患者は、治療に抵抗し回復過程が遷延化する症例が多いように思われる。今回、幼小児期の虐待体験を有する群と有しない群について、対人関係ネットワークの基盤となる愛着のタイプと対人信頼感を比較し、レジリエンスについて検討したので報告する。

被虐待群は児童相談所に通報された症例もあるが、ほとん どは、診察の中で患者自ら体験を訴えた症例である。尚、統 計の結果は症例が特定されないように配慮した。

患者背景(その1)			
虐待体験あり		虐待体験なし	
人数(総数)	44名	63名	
男性	17名	33名	
女性	27名	30名	
平均年齢(総数)	32±9才	41±14才	
男性	35±7才	41±15才	
女性	30±9才	41±13才	
平均年齢(全体)	男性 38±13才		
	女性 36±12才		
うつ病(抑うつ状態)(F3群)			
自己評価尺度(CES-D)41±9(n=28)		37±11(n=28) (p>0. 05)	

患者背景(その2)主病名			
虐待体験あり(n=44)		虐待体験なし(n=63)	
F1.	1	2	
F2.	4	0	
F3.	29	36	
(内訳)	うつ病 28名	33名	
	双極性障害1名	3名	
F4.	8	22	
(内訳)不安障害(パニック障害等)6名 17名			
	適応障害2名	5名	
F5	1	2	
F9	1	1	

被虐待体験者の虐待の種類(重複あり)

1、身体的虐待 30% (n=16)

2、ネグレクト 42% (n=22)

3、心理的虐待 26% (n=14)

4、性的虐待 2% (n=1)

アダルト・アタッチメント尺度(ヘイザンとシェイバー)

他人と比較的容易に親しくなれる。その人を頼ったり頼られたりす 安定型

る。見捨てられることや、逆にあまりにも親しくしてくる人にもほとん

ど心配しない。

回避型 他人と親しくなるのは重荷である。他人を心から信頼できないし、

頼ることもできない。誰かがあまりにも近づくとイライラする。

(DSM-5、反応性愛着障害)

アンビバレント型 他人は嫌々ながら親しくしてくれている。

他の人と完全に一体になりたいと思うが、 ときに他人を遠ざけてしまう。

(DSM-5、脱抑制型対人交流障害)

対人信頼感尺度(堀井・槌谷)

人間一般に対する基本的な信頼感。

他人や集団の言葉、約束、口頭や文章の陳述をあてにすることが出来る 一般的な期待。1から17問あり、5段階で評価。

1、人は、基本的に正直である

2、人は、頼りにする人がわずかしかいない

3、人は、多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする

4、人は、他の人の親切に下心を感じ、気をつけている

5、人は、ふつう漕く正しく生きる

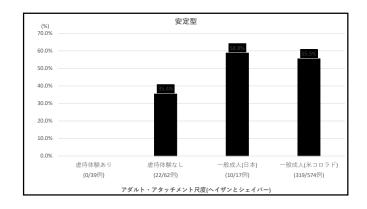
6、人は、成功するためにうそをつく

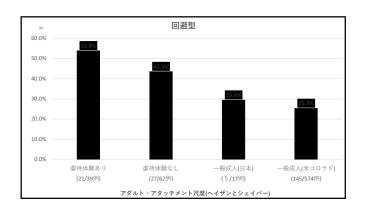
7、人は、近ごろ誰も知らないところで多くの罪を犯している

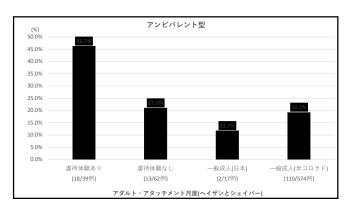
8、人は、ほかの人と触実に関わっている 9、人は、誰かに利用されないかと思い、気をつけている

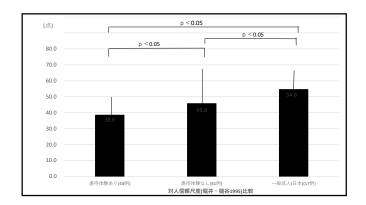
10、人は、誰かを信用しない方が安全であると思っている
11、人は、ほかの人に対して、信用してもよいということが
はっきりわかるまで、用心深くしている
12、人は、口先ではうまいことを言っても、結局は自分の幸せに一等関心がある
14、人は、ほかの人を提動することを内心ではいやがっている

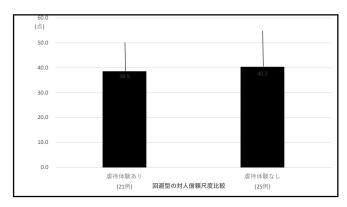
いる 14、人は、自分がするといったことは実行する 15、人は、チャンスがあれば税金をごまかす 16、人は、他人の権利を置めるよりも、自分の権利を主張 する 17、人は、やつかいな目にあわないために、うそをつく

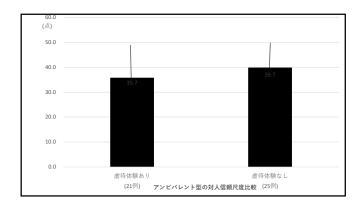


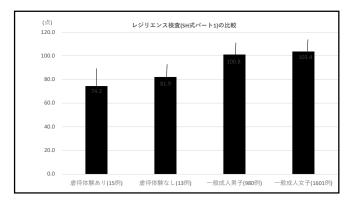












まとめ

- 1、愛着のタイプは、虐待体験あり群は、なし群や一般成人に比べ、アンビ バレント型、回避型が多い傾向にあり、特に安定型は無であった。
- 2、対人信頼度は、虐待体験あり群は、なし群や一般成人に比べて優位に 低い結果であった。
- 3、回避型の対人信頼度は、虐待あり群となし群で比較してもほとんど差は、 みとめられなかった。
- 4、アンビバレント型の対人信頼度は、虐待体験あり群が、なし群に比べ、 低い傾向が見られたが有意な差はみとめられなかった。
- 5、レジリエンス検査は、虐待体験あり群は、なし群や一般成人に比べ低い 傾向が見られた。

結論

被虐待群の愛着タイプは、アンビバレント型、回避型の割合を多く認めた。これらの型は安定した対人関係を築きにくく、また被虐待群は対人信頼度が低いため、対人不信に陥りやすいことが考えられる。このことが、対人関係のネットワークを狭め、すなわちレジリエンスの形成を弱め、回復過程を遅らせる一因になっていると考えられる。

ご清聴ありがとうございました